

# 再資源化と環境保全の技術力で持続可能な社会づくりに貢献する

対談参加者

西田 和也 事業統括本部 生産技術開発部 部長

近藤 有成 名古屋事業所 技術部生産技術課 首席技師

長谷川 裕士 名古屋事業所 技術部生産技術課 主任技師

徳野 剛史 北陸事業所 生産部 生産技術課 次長

八山 岳史 九州事業所 生産部生産技術課 首席技師

磯村 和則 関東事業所 副工場長 技術部 次長

## 環境創造企業としてのダイセキの社会的価値

—— 環境創造企業としての社会的な立ち位置について技術的な観点からどのように認識していますか？

**西田** 産業廃棄物回収・リサイクル業のリーディングカンパニーとして業界を牽引してきたダイセキですが、災害時や緊急時には被災地のために役立てることも、大きな存在意義だと感じています。

**磯村** 東日本大震災では、関東事業所で緊急車両を出勤して被災工場等の薬液、廃液や廃油の回収に向かいました。被災地の方に喜んでいただき、復旧に貢献できたことは我々にとっても大きな喜びでした。自然災害のみならず、

工場火災や廃液漏洩のたびに迅速に駆けつけて廃棄物の処理や復旧にあたってきたのがダイセキという会社です。

**長谷川** 多様な顧客ニーズを捉えたビジネス展開で、国内のあらゆる製造業がお客様であるため、事業の裾野は本当に広いです。この国の産業を下支えする縁の下の力持ち的な存在だと自負しています。

**徳野** ダイセキを知ってもらうと、一般的な産業廃棄物処理業のイメージが覆されると思います。なにしろ私たちは埋立地も、焼却施設も持っていません。様々な廃棄物をこの手で資源として蘇らせるというのが創業から一貫したポリシーです。

**近藤** 他社が捨てるようなものを資源に変えています。発想力と技術力でマイナスをプラスへと転換してきました。それがダイセキの成長力ですね。



後列左から 八山、磯村、西田、長谷川 前列左から 徳野、近藤

## ■ ダイセキの失敗を活かしながら挑戦する風土

### —— ダイセキの成長の原動力はどこにあると考えますか？

**西田** 世の中の不可能を可能にできたのは、ダイセキの自由な社風のおかげです。このメンバーで一番失敗しているのは私だと思いますが、失敗も新しい知見を見つけるための経験だという考え方が浸透しているので、失敗を恐れず挑戦する風土があります。

**徳野** 失敗の経験が次の技術に結びつくことは、私も何度も経験しています。ダイセキでは失敗で終わらせず、次のステップや別分野で活かすことが当たり前になっていると思います。

**八山** 事業所、技術者同士のネットワークも強力です。それぞれ地域の産業に即した技術を培っていますが、新たな課題に直面したときは、事業所を超えて情報共有や技術協力ができます。オールダイセキで高め合う風土が根づいていると感じます。

## ■ 廃棄物同士で、有害→無害化へ 「技術×現場×規模」の強み

### —— 他社と比較してダイセキがもつ強みについて教えてください。

**八山** ダイセキの強みで他社の追従を許さないのは、廃棄物同士を掛け合わせることで無害化する複合処理の技術です。

**磯村** 本来ならば処理薬剤を購入しなければならないところを廃棄物で代用することでコストを抑え価格競争力を高めることができます。

**長谷川** 実用化に欠かせないのは物量です。廃棄物の搬入量はつねに不均衡が生じますが、ダイセキは多拠点・大量・多種で大規模施設で廃棄物を扱うために、製造の調整や融通が利きやすい利点があります。このようなスケールメリットを活かすことができます。

**近藤** お客様の工場におけるトラブルも、すぐ駆けつけて解決する技術者のフットワークと技術力も当社ならではの強みです。

**徳野** 現場の技術力も不可欠です。毎回状態や量が異なる廃棄物をどう扱って、どのレベルまで処理すればいいか、無駄なく確実に処理をする経験値と技能を持ち合わせています。またダイセキは、つねに新たな技術を生み、次へとつなげてきた会社だと思います。たとえば北陸事業所では20年ほど前に廃液に含まれる銅の回収を始め、それからニッケル等の他金属へと技術を拡大してきました。

**西田** 北陸事業所から始まった「資源回収」がその後全事業所に展開されました。これは私が遊び心で廃液から銀を回収し、銀メダルを作ってみたところ、当時の会長の鶴のひと言で、全事業所で廃液から有用金属を回収する「資源回収プロジェクト」として取り組むことになりました。

**八山** 創業から培ってきた「廃油リサイクル」においては、お客様の用途に応じて、再生燃料の発熱量や成分を調整してブレンドする技術を編み出し、今では主力事業のひとつになっています。

**長谷川** 資源回収のみならず、「環境保全」においてもダイセキは貢献しています。微生物を用いて廃液を浄化する活性汚泥処理施設では、他では類を見ない高い能力を持つ微生物を運用しながら大規模な水処理を行っています。行政の下水処理場に匹敵するほどの処理能力で、なおかつお客様では処理できない汚染度の高い廃液がダイセキには集まってきます。これを処理するために我々の技術力も微生物も進化を遂げてきました。

## ■ ダイセキの将来に向けて必要な技術

### —— これからも成長・発展するために必要な戦略について技術的な視点から教えてください。

**近藤** 振り返れば、今から50年以上前にダイセキが確立した廃油リサイクルは、サーキュラーエコノミーの走りだったと思います。

**西田** 今後サーキュラーエコノミーをビジネスとして確立するために、今後は「分ける」技術を究める研究開発が重点課題のひとつになると思います。

**長谷川** たとえば、製造業のサプライチェーンや生産計画から私たちが関与し、製品処分時に分別・分解しやすい原料・工程の開発にも携わっていくということですね。

**徳野** 私たちと異なる技術をもつ事業者も巻き込み、製造やリサイクルの仕組みを根底から変えていく試みも不可欠だと思います。

**八山** 私がいる九州エリアでは半導体産業が盛んですが、時代とともに廃棄物の中身もまた変わっていきます。先を見越して、より汎用性の高い処理施設の設計を進めていきたいと思っています。

**磯村** これまでダイセキの技術者が、技術を次へとつなげてきたように、次世代を担う若いメンバーの教育、施設、職場環境の充実も急務です。

**西田** 未来に引き継いでいきたいのは、ダイセキに脈々と息づく「もったいない精神」です。どんな廃棄物もどうにかして再資源化できないかと、私たちは常日頃真剣に考えています。